

ヨハネによる福音書8:1-11 憐れみの信仰は人を生かす(26. 3. 1)

もし、皆さんが今日、誰にも言えない失敗をしてしまったとしたら、誰に会いに行きたいですか。厳しく正しさを話す人でしょうか、それとも、ただ静かに寄り添ってくれる人でしょうか。

聖書の中には、二種類の信仰が登場します。一つは、正しさを武器にして人を追い詰める「裁きの信仰」。もう一つは、罪人を包み込み、再び立ち上がらせる「憐れみの信仰」です。今日は、死ぬしかなかった一人の女性が、イエス様の憐れみによってどのように「生かされたのか」を一緒に見ていきたいと思います。

イエス様が人々を教えておられる時に、突然、大騒ぎになってきました。それは、律法学者とパリサイ人が姦淫していたある女性をその現場から、そのまま捕らえられてイエス様の所に連れてきたからであります。そして、人々の前にその女性を立たせて、その女性が犯していた罪を公にしなげ、イエス様に訪ねました。「先生。この女は姦淫の現場でつかまえられたのです。モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところで、あなたは何と言われますか。」

律法学者とパリサイ人は、姦淫した人をどのようにすればいいのか、分からなくて、イエス様に聞いているわけではないです。彼らはイエス様を陥れるために、わざとそのような質問をしました。その質問について、イエス様が、もし、モーセが言っているとおり、石で打ちなさいと言うと、ローマ帝国の法を違反することになります。当時、ユダヤ人はローマの支配を受けていたので、死刑を執行する権限はローマ帝国にありました。また、姦淫を犯したのに彼女を放してあげなさいと言うと律法を否定してしまうことになります。イエス様がどっちを選んでも引っかかるしかないような罠でもありました。

そのぐらい律法学者とパリサイ人はイエス様を何とかして捕らえようとしていました。なぜなら、いわゆる宗教指導者と呼ばれていた自分たちの立場を守るためでした。イエス様の教えがもっと權威あるものとしてだんだん人々に受け入れられるようになってきましたし、そして、律法の本質的な面をイエス様は貫いて話しているから、自分たちの立場がなくなってしまうのではないかという心配したからでした。

要するに自分の立場を守るためなら、姦淫を犯した女性なんかは、人々の前に立たされても、責められても、殺されても別にどうでもいいです。イエス様を陥れるなら、残酷で巧妙な手段を使っても構わないです。そのような行動を見せているのが、律法学者とパリサイ人の姿です。

彼らは誰よりも熱心な信仰を持っている人々です。律法学者とは律法を研究し、行い、教える人です。つまり、律法の神学者だと思えばいいです。そして、パリサイ人とは徹底的に律法を守ろうとする人です。しかし、そのような彼らの姿にはほんのわずかな憐れみさえ、赦しさえ持っていなかったです。定める心、批判する心、自分の利益と正しさだけを表そうとするのが彼らの信仰の姿でした。

皆さん、憐れみがない信仰、赦しより定めている心だけが残っている信仰、自分の利益だけ考えている信仰とは、いかに恐ろしいことなのか、彼らの姿を通して私たちは読み取れると思います。

たとえ、そういう人と同じ空間にいるとしたら、私たちは気楽にいられるのでしょうか。何か間違ったら、「すぐ、そうしてはいけないよ」と定められたり、非難されたりすると、そういう人のそばにはいられないです。いつ定められるか分からないからです。

先週、日本バプテスト連盟の新任牧師研修会で聞いた話ですが、ある教会で新しく牧師が赴任しました。しかし、以前の牧師と連れ合いは月曜日ごとに教会に来て、掃除を毎週、していたそうです。多くの牧師たちが月曜日にお休みの日を取っていますので、月曜日に来て掃除をするのが当たり前ではないです。しかし、新しく赴任した先生と連れ合いは、月曜日に教会に来て掃除をやらなかったです。それで教会のある執事の方が、牧師の連れ合いに電話し、呼び出だのです。それが何回もあり、結局、連れ合いはノイローゼになってしまい、その教会にいらなかったという話を聞きました。

皆さん、憐みと赦しと愛がない所には誰でも行きたくないです。私たちの教会があるいは、家庭が定め、非難、自分の正しさだけ、表そうとすると、お互いに傷つけられ、バラバラになってしまうのです。しかし、憐み合い、赦し合い、愛し合う所には、もっと行きたいし、励まされ、癒され、生かされるのです。

ある子供精神健康の専門家が次のようなことを語られました。[子供たちは毎日、親を赦す]という話です。まさに、我が家では小学校2年生と幼稚園に通っている子供たちがいるので、この間、その話にとっても共感する出来ことがありました。以前、私はセウンを叱りました。すると、セウンは泣きながら「パパきらい。パパと話さない。」と言って、向こうの部屋へ行っていました。

よく考えてみると、大したことでもないことで怒ってしまったのです。私がただ疲れていたもので、セウンが私が、思う通りに動いてほしかったのですが、私が思う通りにやってくれなくて、カットとなり、怒ったわけです。振り返ってみるとそこまで、怒る必要はなかったのに、セウンに申し訳ないことをしたなと思いました。娘と私の間に少し、気まずい雰囲気がありました。ところが次の日、私が部屋で座っていましたが、セウンが入って来て、私にぎゅっと抱きついてきました。その瞬間、私が悪かったですが、先に来て私の胸に抱きついてくれたことに、未熟なパパのことを赦してくれた感じがして、とてもありがたい思いで感動しました。

そういう面では、わが教会はそのような憐みと赦しと愛がある所だと思います。たとえ、礼拝の司会を少し、間違っても私たち、大丈夫ですね。たとえです。司会者は間違わずよくやっています。たとえ、間違っても、責められる雰囲気ではなく、うちはむしろ、励ます雰囲気です。それが私はとてもいいと思います。私の日本語の発音が少しおかしくても、むしろ、皆励ましてくださり、褒めてくださるのです。私が赴任したばかりの時、7年ぶりに日本語でメッセージをしたのが、難しいですと言ったら、千江子さんが次のように励ましてくださいました。「うちは多少不自然な日本語には慣れていきますから、大丈夫です」と言われました。深く考えてみると、喜ぶべきか、悲しむべきか、分かりませんでした。とにかく、心配している私に「大丈夫だから安心してください」という意味だったのです。讚美や司会やメッセージなど、前で間違ったら、赦されない雰囲気だったなら、だれがやろうとするのでしょうか。もちろん、主なる神様に捧げることなので、心を尽くしてやる必要はありますが、すこし、足りなくても、弱くても励まし合い、赦し合い、憐れみ合う時に、人は成長していくし、生かされていくのであります。

本文のイエス様を見てください。イエス様は律法学者とパリサイ人と全然違う姿でした。イエス様によってこの姦淫した女性は生かされていくのです。

人々の非難や怒りで震えていた彼女にイエス様は、なんと語られたのでしょうか。11節と一緒に読んでみましょう。そこで、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今から決して罪を犯してはなりません。」と語られました。

ある意味では、この女性は自分が犯した罪のゆえに人々から非難や怒りを受けなければならなかったです。しかし、イエス様によってこの女性は生かされたです。死ぬところでしたが、救われたのです。

死にそうと思ったのですが、実は助かったと感じた時、どれだけホッとするのでしょうか。

私が中学生の頃、学校には「4大恐怖教師」と呼ばれる恐ろしい先生方がいました。その一人が体育の先生でした。ところが、なぜかその先生は私をととても可愛がってくださり、特別な関心と愛情を注いでくれました。

ある日のこと、朝寝坊をしてしまい、遅刻しそうになって必死に学校へ走って行きました。当時、私の学校は中学校と高校が一緒になっていました。私の前を走っていた高校生のお兄さんたちが、先に校門へと駆け込んで行きました。

すると、門の横にはあの恐ろしい体育の先生が立っていました。先生は遅刻した高校生たちに「伏せ」の姿勢をさせ、お尻をバットで一発ずつ叩いていました。お兄さんたちは叩かれたお尻をさすりながら、教室へと走って行きました。

その光景を見た私は、「ああ、もう(終わった)」と思いながら門に向かいました。その時、体育の先生とパッと目が合ったのです。すると先生は、私を見てニコッと笑い、顔を横に振りながら「早く入れ」と合図を送ってくれました。

「終わった」と思っていた私は、「助かった！」という思いで教室に入りました。その時、「自分の過ちが許された。私は愛されているんだ」という実感が強く湧き上がり、それ以来、以前にも増して先生の前で正しく行動するようになりました。

イエス様は、姦淫の現場で連れてこられた女性を「罪に定め(裁き)」ませんでした。もちろん、それは「罪を認めた」ということではありません。イエス様は「行って、これからは決して罪を犯してはならない」とはっきり語られました。

「罪に定めない」ということは、「罪を犯してもいい」ということではありません。むしろ、罪を悔い改める「機会」を与えてくださったのです。新しく生き直すチャンスを与えてくださったのです。

これからは「姦淫した者」としてではなく、「イエス様に赦された者」として生きていけるようにしてください。

果たして、この女性だけがイエス様に赦され、新しく生きる機会を与えられたのでしょうか。ある意味では、本文に出ている女性は私たちの姿かも知れません。ただ、私たちの過ちと罪はばれないだけであり、公にされてないだけであります。イエス様が石をもって女性に投げようとする人々に、「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」と話されました。私たちは、過ちと

罪が何もないですか。心の中でどれだけ、人を定めたり、批判したり、あの人がいなくなったらという思いを無意識に思ってしまうのが人であります。今思っていることが、スクリーンにそのまま移っているとしたら、人がどれだけ罪人なのか、否定できないと思います。。

本文に出ている女性だけではなく、私たちも神様の前で、どれほど多くの憐れみを受けてきたでしょうか。過ちを犯し、罪を重ねても、神様がどれほどの慈しみをもって私たちを赦してくださったか計り知れません。

もしその都度、パリサイ人や律法学者のように、神様が私たちの罪の一つひとつ裁き、処罰されていたとしたら、私たちは決して今ここにはいられないです。私たちは絶えず神様の憐れみを受け、罪を赦され、新しい人生を歩むチャンスは何度も何度も与えられているのです。

これこそが、私たちが他人を憐れみ、赦すことができる唯一の理由です。また、パリサイ人や律法学者のような「恐ろしい信仰」に陥らないための秘訣でもあります。

なぜなら、私たちの内側には本来、誰かを憐れむ心も、赦す心も、愛する心もないからです。たとえあったとしても、それは「条件付き」のものです。自分の基準に合う人だけを憐れみ、自分の好きな人だけを赦し、好きな人だけを愛したいと思うのが私たちです。自分を苦しめる人や、あまり好きではない人を憐れみ、赦し、愛することは、私たちの力では不可能です。

しかし、私たちが「まず」そのような神さまの憐れみと赦しを受けた者だからこそ、他人に対して憐れみの心を持ち、赦すことができるようになるのです。

イエス様は今この瞬間も、私たちがどのような罪を犯したとしても、どのような過ちをしたとしても、私たちを罪に定めることはなさいません。私たちを赦してくだり、悔い改める機会を与えてくださいます。ですから、イエス様が願っておられるのは、私たちが「赦された者」として、罪から離れることです。赦された者として、新しく生き始める力と機会を与えてくださるのです。

私たちの心に憐れみと赦し、そして愛があれば、相手を待ってあげることができます。その人を包み込むことができます。しかし、私たちの心が裁きと憎しみで満ちていれば、相手を待つことも、共にいることもできません。

人は誰でも感じるのです。この人が私を心から歓迎しているのか。それとも自分を嫌っているのかを分かるのです。

先週の水曜日、新任牧師研修会が午後に終わり、その日は地域の祈禱会に参加することになっていました。どうしようかと考えて、札幌バプテスト教会の祈禱会にオンラインで参加したいと思い、ホームページを調べてみました。すると、水曜夜の祈禱会が19時から始まるとあり、西本先生に直接連絡するのは申し訳ないと思い、教会へ電話をかけました。すると、電話に出られたのが偶然にも西本先生ご本人でした。

そのおかげでズーム(Zoom)で参加することができましたが、そこには10名ほどが集まっていました。その日は、ある信徒の方の証しを読んで分かち合う時間でした。その方はコロナ禍の様々な理由で3年ほど教会を離れていましたが、久しぶりに教会へ行った時、ある子供が自分の名前を覚えて呼びかけてくれたそうです。それがとても嬉しくて、顔が赤くなるほど感動したというお話でした。教会が温かく迎えてくれたことで、その方の心はさらに開かれたのです。

私たち一人ひとりだけでなく、私たちの教会がイエス様の愛と憐れみ、そして赦しに満たされているなら、人々は、辛い時や疲れた時に、世の中では得られない温かさを求めて、ますますここに来たいと思うようになるでしょう。

この共同体を通してイエス様を知りたいと願い、イエス様の御言葉に従って、もはや罪の道や誤った道から離れ、新しい人生を歩み始めるようになれると私は思います。

本文に、罪を犯した女性に対し、多くの人々が彼女を罪に定め(定罪)、「当然石を投げつけられるべきだ」と非難し、石で打とうとしました。もしそのままだったなら、彼女は死んだのか、命が助かったとしても、人々の非難と定めで、深い傷を負ったはずで

しかし、その多くの人々の中で、イエス様だけは彼女を罪に定めず、憐れんでくださいました。だからこそ、彼女は生きることができ、新しい人生を歩み始めることができたのです。

私たちも、イエス様によって憐れみを受け、赦され、救われた者たちです。そんな私たちが集う教会に、どのような人が来られたとしても、憐れみと愛、そして赦しを通して、傷ついた人や疲れている人が力を得て、励まされ、救いを得るような共同体になることを心から願います。

以前、長野で開催された家庭セミナーに参加した時のことです。当時、私は11年間仕えた教会を辞めたばかりで、牧師でも伝道師でもなく、どこにも所属していない状態でした。しかし、その教会の牧師と聖徒の皆さんの愛と仕えによって、私と連れ合いは、大きな慰めと回復を経験しました。ほかの参加者は日本の牧師の方々に牧師の経歴も長いですが、でも私の夫婦は約8年前なので、今よりもっと若かったです。職分と歳に関係なく、その教会の牧師と聖徒の方々が心を込めて食事を準備してくださり、家に泊めてくださいました。

最終日の主日は、本来なら午後の終わりまで参加する予定でしたが、私たちは朝早くに礼拝だけを捧げて埼玉へ戻らなければなりません。私たちが早めに出発すると伝えると、なんと日曜日の朝食に招待してくださったのです。牧師は、日曜日のメッセージの前が一番忙しい時間であるにもかかわらず、牧師夫人が心を込めて食事を準備してくださいました。それで牧師先生と一緒に食事をし、その後、新幹線の駅まで先生は私たちを見送ってくださいました。その姿に、私たちの夫婦は、どれほど大きな励ましと慰めを受けたか分かりません。

あまりにも感動して、その時、私は神様にこう祈りました。「神様、いつか私もこの日本という地で、日本の牧師先生かたを励ますことができる機会を私にも与えてください」と祈りました。何者でもなかった私たちを憐れみ、愛で受け入れてくださった牧師と執事の方に、今でも心から感謝しています。

私たちも、神様からそのような愛と憐れみ、そして赦しを受けた者です。ですから、私たちの周りにいる人々に対しても、憐れみと慈しみ、そして赦しをもって接していきましょう。多くの痛みや傷を抱えている人々が、この共同体を通して慰められ、力を得て、救いにあずかる恵みがありますようにお祈りしたいと思います。